

価値の遠近法

—この間の組織的後退に対する省察を踏まえて—

この文章は、二〇〇一年に組織的な後退（生活拠点からの逃亡）を経て、心身ともに疲弊した状態で書かれたものである。今から思えば、自己省察とイデオロギーの混ぜこぜといい、「である」調の文体を「ですます」調に改めているなど全く意味不明でしかないが、当時の心象をある意味表していると思う。主体形成における「倫理的」という意味の履き違えがそこでの問題点と言えよう。

INTRODUCTION

わたしたち600地区は今年の年頭に、昨年の組織総括として「価値相対主義」の克服を課題にしました。九〇年代戦略のフェイズⅡとしてのサークルの実態化を押し進めているわれわれは、サークルなどでの個別の課

題（＝価値）と対質し、分節化をなしつつ、WIR（われわれ）の価値を、そのサークルに集う仲間たちと共に共有していくことを目指しています。

何故ならサークルで主要に話し合われる課題は、それ自体固有の価値を有していて、その価値をただそれとして受け取るだけの受動的な在り様を超えて、生き生きした能動的な人間関係を取り結んでいきたいと思っているからです。

哲学者・廣松涉氏の言葉を借りれば、二十世紀終わりの資本主義という通用的価値に対し、妥当的価値を対置していく、オルタ潮流としてのわれわれの運動を切り開いていく、ということになるかと思います。

エコロジーの告発が近代文明の終焉を予言したように、量子力学の提唱が、それまでのニュートン物理学（＝近代科学のパラダイム）の変更を要求したように、われわれブントは、現代資本主義の矛盾を告発している「知のエトス」とも言うべき、このような思想と対質しながら、分節化を深め、広く「近代の超克」を成しうるトータルな時代認識と、オルタナティブを培っている、といつたら少し大袈裟な表現でしょうか。

ともあれ現実に社会的差別が存在し、人々が殺し合うような戦争が恒常化しているこの社会の矛盾を何とか変えたい、平和で人々が助け合い、肩をよせあって生きる社会というのはどうやつたら実現できるのかを、理想や「絵空事」のレベルに押し止めず、「現実を変革する現実の運動」として実現していくことを、私自身目指したいと思っています。

そういった思いを出発点にして、現実にはブントの仲間との交流を通じながら、私はこの運動を主体的に（少なくとも主観的には）ここ何年か担ってきました。しかし今年の五月以降、自らの抗戦意思というかパトスが、自分でも目に見えて陰つてくるのを実感しました。一このように書くと「こいつはなんて客観的な奴なんだ。」という声が返つてくるかもしれません。事実「抗戦意思」なり「パトス」なるものが実態的に存在しているわけ

ではなく、私の価値の置き様が相対化してしまっているに過ぎないのですが、一応省察していく文脈上、このような心情に仮託して、話を進めていきます。

本稿は未だ抗戦意思喪失下にある私が、今の現状を超えてなんとか立ち直ろうともがいでいる過程を綴ったものです。強烈な思い込みや、ルサンチマンを抱えながらも、私はどうしてもブントで闘いたいと思うし、辛苦を共にしてきた多くの仲間に絶対応えたいと思います。

禪坊主のような懺悔や、逆に「理念の押し売り」といった不毛な論に陥ることなく、なにより明日に繋がるような前向きな省察を目指しつつ、以下本論に入っていきます。

一、組織創造性ということを如何に考えていけばいいのか

なぜ、かく私は消耗するのかということを考えてみると、当時一番大きい要因としては、家族や恋愛といったパーソナルな問題も当然あるのですが、やはり組織上生起した問題が一番大きかったのではないかと思います。それまで一緒に運動を担ってきた仲間が、今年の始め以来、勤めている職場との軋轢のなかで落ち込んでいったのですが、それに対して同じセクションで運動を担っている私たちが、何も適切な対処を成しえなかつたと、自身強く感じた訳です。

そのAさんというのはブントで十年以上も運動を担ってきた人で、昨年の核実験反対の運動から、沖縄の基

地撤去の運動展開でも、自らムードメーカーとなつて、私たちを先頭で引っ張ってきた人です。そんなAさんが消耗したというのは、運動主体としてのわれわれにとってとてもショックな事でした。しかしそれ以上に私にとつてショックだったのは、彼女の問題の立て方でした。

何でも彼女は、今まで自分は最先頭で頑張ってきた。だけでもう限界であるゆえ、若い人に道を譲り、自分はリタイヤさせて欲しいと仲間に語ったと言います。私はそれを聞いて、何ともやり切れない思いで一杯でした。自分の人生の大半を（Aさんの思いとすれば）「ブントと革命の為」に捧げ、自分はここまでやつてきたんだという思いは、私でなくとも多くの共に時代を過ごした仲間であれば、容易に共有できる事だと思います。私自身、『長征』での中国人民解放軍の生き方に入間的な正義を感じたし、『不屈』のグエン・ドゥック・トワンのように生きたいといつも思つて自分を鼓舞してきました。

しかし問題なのは、そうやって自分を追い詰めてまでして得られる「主体性」というものは、一体何なんだろう、ということでした。

Aさんや私もそうですが、八〇年代にこの運動に関わり、主体形成をしてきました。そうすると現実の社会は矛盾に満ち溢れていて、世界の至る所で自由を求める人が立ち上がつていました。彼ら、韓国学生・労働者のすさまじい闘いや、三里塚農民の不屈の闘志は、自分の生きるべき道を文字通り私達に問うていたのです。そのなかで私はブントで闘うことを選択しました。少なくとも私はそう自負しています。

しかし権力・公安警察や右翼との緊張関係を一方で強いながら、「運動につぐ運動」、「動員につぐ動員」を自らに課していく、当時の運動展開を担うなかで、次第に闘う確信が後景化してしまい、機能的な問題把握が首をもたげてきます。

つまりパラダイムの問題として、己の内に真理を求めるのではなくて、神学の系譜にいう「絶対者」という概

念が正しいのかは判りませんが、「ブント」が自分達にとって（なにも一般化するつもりはありませんが）外部にあって、「真理」を体現する全き存在であり続けた（そうあって欲しい）のだと思います。そしてその真理にかしづき従つてゐる間は、自他共に「主体的」だということになり、それを外れると他者からは糾弾され、自分は「非主体的」であると思い込む構造に入つていくのです。

そういったサンクションの中で主体形成されてきた主体にあっては、当面する課題に対しても、先ず「出来るか、出来ないか」ということが価値化されます。当然プロセスも問題にされはしますが、原因と結果の一過程としか見られず、テストのマークシートの如き短絡された○×の評価に妥当していくことになる訳です。

つい先日、7・28集会が終わった夜のことです。事務所に帰つて来た私に対しても、Bさんが「飛行機早くつくらなくっちゃ。ワークショップまであと二週間しかないよ。」などと言うのです。（因みに飛行機というのは、八月のワークショップでやつたゴム動力飛行機のことです）前の日まで、いや当日の朝まで「動員だ、動員だ」と言つていた彼が、集会が終わつたら掌を返したように今度は飛行機だなんていいだすなんて、私としては集会に当日まで来てくれるといつていた友人が来なかつたりして、ただでさえ結構落ち込んでいたのですが、彼のその言葉にはつきりいって呆れてしましました。

といつてもBさんの責任感の強さも判るし、そもそもこの話は一連のプロセスを経てゐるので一当初私が責任者でプロジェクトを組んだ事や、飛行機大会の度重なる延期の憂き目にあい、なおざりにされたこと、等々一概にこうだと言えないのですが、少なくともまるでデジタル回線のコード1からコード2に変換されたような印象を拭い去ることができませんでした。しかしそういったBさんの提起に対してもうさんちマンになっている私の対処も問題にされなければなりませんが…。

もとよりここでは誰が悪いのかといった、責任の所在を明らかにするのが目的ではありません。しかしわがセ

クションがどのような状態にあるのかというと、「機能主義」やら「下部主義」などという表現が、さもぴったりするような在り様なのです。そういったなかでAさんは消耗していったのでしょうか、何とかこういった在り様をかえていきたいと思うのですが、ここでキーワードとして、使い古された言葉かも知れませんが「組織創造性」について取り上げてみたいと思います。

組織創造性ということを共同主觀性の高次化と言い換えてもいいわけですが、これをわれわれのめざす運動の内実との関連で捉え返してみると、主一客の分離、精神労働と肉体労働の分離を前提にしたところの、身分的・階層的なヒエラルキーというエンドクサを超えて、『共産党宣言』でのマルクスの言葉でいう「各人の自由な発展が、万人の自由な発展の条件になるようなアソチアツィオン（協同社会）」を目指していくということになるだろうと思います。

より平易にいえば、組織なる物象化された機構が存在しているのではなくて、各個人の自発的な目的意識性を起点とした有機的な WIR（われわれ）を形成していくということですが、そこでの目的意識性を不斷に喚起、交流していく場こそワークショップであるし、サークルであると思うのです。

昨年のサークル運営などを通じて、価値相対主義に陥っているのではないかという指摘を他の仲間から受けてきたわけですが、このことはつまり、そのサークルで何を価値とするのかが見えなくなっているのであって、端的にいって目的意識性が希薄になっていることを示しています。

それは、われわれは資本主義社会という経済社会構成態の成員として定立しつつも、現今社会的矛盾に対して、その克服を目指しつつ、この共同体（＝ブント）に結集し、そこでの価値観の刷新をも含んだ社会変革をかち取ろうとしています。そしてここで生み出される共同性が、来るべき未来社会の萌芽になっていくはずであるのに、現実にわれわれが生み出しているものは仲間との反目やルサンチマンという具合に、ブルジョア社会の

価値感を超えていないからです。

折しもこの間われわれは、「前衛一大衆理論の実体主義」を問題にして、レーニン組織論的な「目的意識性と自然発生性」というパラダイムからのテイクオフを課題にしているわけです。レーニンは、『何をなすべきか』のなかで「真理の体現者たる先進的な前衛が、遅れた大衆を指導する」といつていますが、そのような一方通行な人間交流ではなく、廣松涉『弁証法の論理』で展開される *für es* — *für uns* 規制を回路に、共同体としての *Wir*（われわれ）を形成し、当時主体との相互共軸を課題にするというものです。

相互共軸の意味といえるものについては、ブント・ワークショップなどでの提起を踏まえて、最近ようやく理解しはじめたのですが、現実にはなかなか共軸できない現実をどうすればいいのでしょうか。

例えば、わがセクションでは月一でサークルを組織していますが、確かに「真理」の強要ではない場として、この間サークルは実体化してきています。でもその反面「真理」などないんだから、あくまでもサークルメンバーの主体性に任せる、という運営をなかなか変えることができずにいます。

これでは、価値を打ち出すどころか相対的な不価値論になってしまいます。事実わがサークルメンバーの中には、サークルでの討論は面白いけど、集会には行けないという人もいて、ちょっと困りものなのです。

ましてや様々な価値が並列で布置されているだけのサークルになんてなんの魅力もないと思います。ブルジョア社会的「自由な個人」の集合体から、「自由で目的意識をもち、故に活動する」共同体への前進をかち取り、社会矛盾に対してもう向き合うのかを、ともに共有しあいつつ、新たなる価値を創造していくことがなによりも *WIR*（われわれ）の価値になつていかなければならないでしょう。そして私自身も価値の発信者として、ともに学び・学ばれる関係をつくつていきたいとほんとうに思います。

それを踏まえて以下は、価値相対主義を超えようと、「遠近法」をキーワードにして今年年頭以降学習して

きたノート（五月に提出したものに少し手を加えたもの）です。まだ観念の域を出ていませんが、今後の省察の糧にできたらと思っています。

一、シンボル形式としての遠近法

われわれの課題である価値の遠近法を模索していくにあたって、ここでまず取り上げたいのは、エル温・パノフスキイの『△象徴形式△としての遠近法』です。パノフスキイといえば、絵画観賞や美術史研究の分野でイコノロジー（図像解釈学）の権威として知られていますが、イコノロジーというのは絵画などでその作品を成立させているもろもろの因子—歴史的、社会的、文化的因子—を総合的に再構成し、その作品のもつ本質的な意味を探索することにあります。

日本でのイコノロジー研究家、若桑みどり氏の「芸術作品がわれわれにあたえるものは、常に目に見える知覚的領域の限界を踏み越える」（若桑みどり著『絵画を読む—イコノロジー入門』NHKブックス）という言葉にも明らかのように、ある芸術作品が創作された時代状況や、社会構造をトータルに捉えつつ、その意味を把握するということです。パノフスキイは中世からルネサンス期にかけての図像表現の研究を通じて「今世紀最大の美術史家」とまで評価されているそうです。

この『△象徴形式△としての遠近法』は、パノフスキイがこのイコノロジー研究に勤しむ以前の一九二〇年代

に、当時の友人でもあつたエルнст・カッシーラーの影響下で執筆したもので、表題の「象徴（シンボル）形式」という言葉からも明らかのように、パノフスキイはこの本をひとり美術表現一般に解消してしまうことなく、絵画などに見られる技法としての遠近法の展開を踏まえつつも、そこで精神史とでも呼べるパラダイムの分節化を通じて、其時の世界観の内的動因を彫刻して見せます。

具体的には古代社会での「手でつかむこともできるような」（E・パノフスキイ『象徴形式』としての遠近法）哲学書房、以下引用は本書による）曲面遠近法から、その「逆転」としての中世における等質的空間、そしてルネッサンス期における平面遠近法の成立を通して、近代の体系空間である中心遠近法へと至る過程を、精緻な図像解析とそのイデオロギー的反映から明らかにしています。

「個々の芸術の時代や地域が遠近法を有するかどうかということだけでなく、それがいかなる遠近法を有するのかといふことが、これらの時代や地域にとって本質的な重要性をもつ」というパノフスキイの言葉にも明らかのように、あくまでも社会的価値との関係で遠近法の変遷が考察されているのです。

例えば中世における等質的空間の形成は、古代遠近法の解体を通じて始めて成立したのですが、その背景には教会支配のもとで一切の権威を神に一元化しようとする意思の下、宗教画に端的なように全ての対象物が平面に刻みこまれていきます。

このように各々の時代のパラダイムに応じて、遠近法的配置が成されていくのですが、いずれの時代においてもシンボル形式において芸術というものが位置づけられます。そしてデカルト以降の近代においては、古代、中世と続くそれまでの時代の総合としての遠近法が成立します。

それは中世での神聖不可侵な権威を擁護していく立場から、自立した個人の社会契約へ至るパラダイムの変遷というダイナミズムが存在しています。つまり創作対象に対する創作主体の態度表明によって、対象の意味内

容を任意に変更できる可能性と言い換えてもいいのですが、そういう積極的な要素を遠近法は担っているわけです。

ちょうど「自由・平等・友愛」を旗印に闘い取られた人民の権利主張としてのブルジョア革命に対応するかのようですが、その意味で遠近法は「人間の意識を神的なものの容器にまで広げ」る役割を果しているのです。いかにそれがブルジョア的権利の枠内であつたとしても、いわば集合空間から体系空間への偉大な発展とパノフスキーが主張する肯定的な要素をまるで否定するわけにはいきません。

しかし遠近法の語源である *Perspectiva* という言葉は、ラテン語で「透して見る」という意味です。パノフスキーは芸術作品としての絵画を見る主体の眼（＝視中心）を通して、遠近法としての「視覚のピラミッド」が形成されるメカニズムを考察していますが、現実の視空間においてはすべての対象物が相互に△異方向▽であり、△不平等▽な空間でしかありません。

中世の等質的空間を経て成立した近代精密遠近法にあっては、ユークリッド幾何学に代表される、作図によって作りだされた空間として始めて成立するのですが、そこには△前・後、△左・右、△物体と隙間といった視覚に映る空間の区別を否定し、△空間部分と空間内容の総体をただ一つの「連續量」（クワントウム・コンティヌウム）に解消してしまいます。

つまり主一客二元論に基づく科学主義的価値観のもとで、中世において成立した等質的空間から純粹に数学的な法則に支配された遠近法が生まれて来るということです。

それは普遍妥当的で数学的に基礎づけることのできる空間には△がいないものの、現実の視覚印象をひどく思い切って捨象してしまうことになります。それは法則のもとへの人民の隸属であり、人間の主体性の剥奪にも繋がりかねない危険性を有しています。

ところで柄谷行人氏はその著書『内省を廻行』の中で、このパノフスキイの言う「奥行き」の遠近法と、認識における「深層」構造とをアナロジーさせながら、「知覚空間」が構造に閉じ込められるというような主張をしています。

ここでの柄谷氏の主張は、遠近法という構造がわれわれの「知の方向づけ」を規定付けているといわんばかりですが。しかしそのようなポストモダン的発想においては人間の能動性や主体性は脱色されるばかりであり、それはスタティックな情勢把握に基づいた因果論や運命論の類となんら大差ない代物でしかありません。

価値というものが遠近法という構造に閉じ込められているのであれば、われわれはいつまでもその呪縛から逃れることはできず、結局ニヒリズムに陥る以外ありません。

そうではなく知の枠組みとしての遠近法が、社会的にも倫理的にも、さらに道徳的にも規範となり、価値となっていくような在り様をめざしていくべきです。資本主義社会において遠近法的に配置されている価値に対して、それが因果であり、逃れられない構造なんだとしてしまうのではなく、それが不合理なものであり阻害をしかもたらさないものであるなら、それを刷新していくことが新たな価値を創造していくことにほかならないでしょう。

三、ニーチェ遠近法解釈をめぐつて

ニーチェは『権力への意思』において、一見自明な先驗性を帯びた同一性が実は後天的な、より端的にいえば「偽」なものにすぎないということの解きあかしを通じて「生の根本条件」を規定付ける遠近法的な認識を主張しています。

つまり廣松渉氏が言うように、様々なドクサや「真理」とされている価値観自身が物象化された相での錯認でしかなく、ゆえにその通用的真理に対して「本来的理念の旗を高く掲げるだけでなく、大理想をいかにして実現していくか、そのペースペクティヴを提示することが緊要」（『新左翼運動の射程』）になります。それがニーチェの言葉でいえば「ある特定種の動物の保存や権力上昇に關する有用性の觀点にしたがつて、秩序づけられ、選択されたある世界」ということになるわけです。

ところで竹田青嗣氏は『ニーチェ入門』のなかで、ニーチェがハイデガーやドゥルーズなど現代思想の思想的なバックボーンになつてゐると言つてゐます。それは私もその通りだと思いますが、しかしその竹田氏のニーチェ理解には物象化的な陥穽があり、とてもニーチェを咀嚼しているとは思えません。

例えばニーチェの遠近法主義という主張があります。竹田氏は目の前のリンゴがその主体にとって「何であるか」という差異を問題にします。人間にとってそれは、みずみずしくおいしそうな果実であり、猫にとっては、まるくでじゃれると転がるものとしか映りません。さらにトンボにとってはもはや何の意味もないものになってしまいます。

このようにある対象（事物）が「何であるか」という認識は、その対象に向き合う生命体の「肉体」（欲望＝身体）によって決定されるというのです。

なるほど、ニーチェの「人間にあっては世界認識はつねに世界解釈である」という言葉は竹田氏のいうような道具連関によって説明できると思います。しかしそれを踏まえて竹田氏にあってはニーチェの遠近法を「欲望相関性」なるエロスの自己発展として規定してしまっています。そういった発想においてはニーチェがあれほど批判した「原因と結果の遠近法的倒錯」を超えることはできないのではないか。

つまりニーチェのいう価値の転倒としての遠近法というのは、世界におよそ存在するすべての物（＝価値）に対する、それをある全体的な有意義性との兼ね合いで序列をつけるということになるわけです。しかしハイデガーが「世界－内－存在」という表現で明確に表現したように、自らをもその構成要素として存在する人間主体が、自然を作り替える際に、自らも自然によって作り替えられていく相互変革の構造を有しているのです。

竹田氏にあってはそういったダイナミズムを全く無視してしまっています。「世界を解釈するもの、それは私たちの欲求である。私たちの衝動とこのものの賛否である。いずれの衝動も一種の支配欲であり、いずれもがその遠近法をもっており、このおのれの遠近法を規範として、その他すべての衝動に強制したがっているのである。」（『権力への意志』）とニーチェが言うとき、「生の根本条件」としての諸価値の様々なせめぎあいを、相対的に見る視点を遠近法的な認識と呼んでいるのであって、ニーチェにとってそれは認識する生と、認識される生との関連をはなれてはありえないということになるわけです。

これを道徳という社会的な通用的価値から見てみると、ニーチェ存命下のキリスト教の道徳というのは生の本能や自然性を拒絶し、自己否定に生きることを強要するものでしかなかったわけです。つまりかかるキリスト者の自己否定は、ある種の自己主張のかくれみのでありエゴイズムだというわけです。

「道徳的な現象は存在しない。あるのはこれらの現象の道徳的な解釈だけである。この解釈そのものは道徳外的な起源をもつ。」とニーチェはいい、そもそも社会共同の「利益」を意図してなされた行為であるはずの道徳が、なにか超越的なものとして真理に祭り上げられていくと、中世の教会支配の欺瞞性を喝破しています。このような転倒した遠近法（＝ルサンチマン）にたいして、ニーチェはもつと能動的に生を肯定して生きる在り方を模索していったのであり、それが一八八九年にトリノのアルベルト広場で昏倒し「狂気の人」になるまで書き綴られた『権力への意志』だったというのは、なんとも皮肉な話です。

ともあれニーチェにあっては、「生の肯定」をキー・タームに、さまざま価値を物象化された道徳の系譜の弊害に陥らざることなく、再指定していくことを目指したのだといえます。これは同時代を、資本主義の物象化の解明を通じて社会矛盾と向き合ったマルクスの思想ともクロス・オーバーするのではないかと思います。

とはいっても、ここで強引にニーチェとマルクスを結びつけることに価値があるのではありません。事実、その後ニーチェの思想はナチズムのゲルマン民族至上主義に流用されていくわけですし、マルクスだってスターリン主義のドグマとして「真理」にまで祭り上げられたのですから。

問題になるのは、ニーチェなりマルクスなりの「真理」批判の内実を咀嚼し、われわれにとつとも妥当性のある命題を選びとっていくことです。「共産主義とは、われわれにとつて成就されるべきなんらかの状態、現実がそれへ向けて形成されるべきなんらかの理想ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を、共産主義と名づけている。この運動の諸条件は、いま現にある前提から生ずる。」とマルクスは『ドイツ・イデオロギー』で書いていますが、われわれの運動というのはやはり人間解放をめざすものでなければならぬとあらためて実感できます。

EPILOGUE

価値相対主義の克服をめざして、半年ぐらい考えてきたことをまとめてみました。現実には六月くらいからほとんどの組織活動に身がはいらず、会議にも辛うじて存在しているみたいな関係しか取り結んでこなかつたわけです。同じセクションの仲間との会話もろくにせず、ひたすら一人で思い悩みながら悶々とした日々を送ってきたのでした。

そんな状態のなかで、今回この文章を書こうと思ったのは、そういうたたなネガティブな自分を奮い立たせようという意味もあつたのですが、もーと大きくなつて悩んでいた私を励ましてくれたブントの仲間や、自分が討論してきたシンパの仲間との関係でした。

共に価値を語り、集会に参加することを通じながら、共軛してくるとのなかで、今の私は在ると思います。未だ出口は見えないし、すぐ元気になって明日からぱりぱりやります、なんてことにはならないと思いますが、闘う気概だけは棄てずに頑張りたいと思います。

(2001.8)